

声も出せない密室カン
ト5連発

収録作品

1. 「静かにしないと聞こえるぞ？」終電逃したカプセルホテルで... 3
2. 最終運行の寝台特急で同室になった元バーテンダーに一杯付き... 26
3. 「泣いてもいい、この部屋は防音だから」閉館後のプラネタリ... 52
4. 「静かにしろよ、全国放送だぞ？」ON AIR中に人気DJ... 75
5. 「塔のカード——今夜、お前の世界が壊れる」推しの占い配信... 98

「静かにしないと聞こえるぞ？」
終電逃したカプセルホテルで
隣の外資コンサルに声を
殺しながら朝まで4回種付けさ
れた金曜深夜

「――起きてる？」

低い声だった。

掠れていて、少し酔いを含んでいて、鼓膜の裏側を直接撫でるような声。

心臓が跳ねた。――無視しろ。無視すればいい。

「……起きてますけど」

答えてしまった。

「よかった。――眠れないなら少し話さないか」

壁越しの囁き。顔が見えない。名前も知らない。ただ声だけが、暗がりの中で震えるほど近い。

終電を逃した話。出張帰りの話。くだらない雑談のはずなのに、その低音がやけに身体の奥に響いて、いつの間にかスマホを胸の上に置いていた。

「――今、どんな顔してる？」

「……は？」

「声、少し上ずってきた。顔、赤くなってるだろ」

「……酔ってるだけです」

「俺もだよ。だから聞くけど――カーテン、開けていい？」

返事をする前に、隣のカプセルのカーテンが引かれる音がした。

そして――自分のカーテンの端に、長い指がかかった。

＊

カーテンの隙間から、手だけが入ってきた。

暗がりの中でもわかる。大きな手。長い指。爪が短く綺麗に整えられている。

「ちょっ……何して――」

「静かに。隣、寝てる」

囁き声。低くて甘い。指先が足首を掴んだ。

冷たくはない。むしろ熱い。酒を飲んだ男の体温。その手が足首から脛脛を這い上がる。作務衣の裾をめくり、素肌に直接触れてくる。

「っ……」

太腿の内側に指が食い込んだ瞬間、全身がびくりと跳ねた。声を出しそうになって、咄嗟に自分の手で口を塞ぐ。

（なんで——知らない男に触られて、こんな……）

指は止まらない。太腿の付け根をなぞり、ボクサーパンツの上から、もう半分硬くなっているペニスを掌で押し包んだ。

「……もう硬いじゃん。声だけでこうなったの？」

「っ……触んな……」

「嫌なら手を払えよ」

払えなかった。

声だけで堕ちかけていた身体が、触れられた途端に裏切った。

「——払わないんだ？」

笑いを含んだ声。パンツの中に手が侵入してくる。直接握られた。先走りで湿った先端を、親指の腹がゆっくり捏ねる。

「ん……ッ♡」

唇を噛み締めた。鼻から甘い息が漏れる。

「いい声。——もっと聞かせて」

カーテンが大きく捲られた。男がこちらのカプセルに入ってくる。
105cm幅に男が二人。身体が完全に密着した——背中に硬い胸
板が押し付けられ、ウッディな残り香と、その下の生々しい汗の匂
いが鼻腔を埋め尽くす。

「デカ……っ、近い……」

「カプセルが狭いんだよ。——動くなよ」

背後から抱き込まれる形で、男の手がペニスを握ったまま、もう片
方の手が作務衣の前を開いた。鎖骨をなぞり、胸の突起に親指が触
れる。

「あ……っ♡ やめ……そこ……」

乳首を弾かれた。小さな突起を親指と人差し指で挟み、くりくりと
捻られる。同時に、下の手がペニスの裏筋を擦り上げた。
二箇所を同時に攻められて、思考が白く散った。

（男に胸触られて、感じてるとか——おかしいだろ……っ♡）

「ここ、弱いんだ」

耳の後ろに唇が触れた。舌先が耳朶の縁をなぞる。全身に鳥肌が立
って、カプセルの壁に肩がぶつかった。

「やめ、耳は……っ♡♡」

「やめない。もっと反応見せて」

甘噛みされる。歯の先端が耳の軟骨を食んで、舌が穴の縁を舐め上
げた。くちゅ、と湿った音が直接脳に届く。

下の手が速くなった。先走りがぬるぬると音を立て始め、狭いカプ
セルの中にじゅく、じゅく、と卑猥な水音が充満していく。

「んゝ……っ♡ あ……やだ、音……聞こえ……っ♡♡」

「お前が出してる音だろ。——ほら、もっと溢れてきた」

親指が亀頭の溝を抉った。溜まっていた先走りがとろりと溢れ、男の掌をてらてらに濡らす。
背中越しに、スラックス越しの硬いものが尻に押し当てられている。
。

(デカイ……こいつの……こんなの……っ♡)

身体が勝手に震えた。怖いのか感じているのか、もう区別がつかない。

「感じてるの、ここだけじゃないだろ？」

手がペニスから離れた。睾丸の裏を撫で、会陰を指の腹でぐっと押す——そのまま肛門に指先が触れた。

「そこは——っ」

「力、抜いて」

「無理……っ♡ 人いるのに……」

「だから声出すなよ。——出したら、もっと酷いことするから」

先走りで濡れた指が、肛門の皺を円を描くようになぞった。きゅっと竦む入口を、焦らすように押しては引く。押しては——引く。

「ひ……ッ♡♡ だめ……そこ触られたら、変に……なる……っ♡♡」

男が低く笑う気配がした。背中越しに笑い声の振動が伝わって、それだけで肌が粟立った。

＊

仰向けにされた。

男が覆いかぶさると、カプセルの天井が消えた。視界が全部、知らない男の輪郭で埋まる。暗がりでもわかる切れ長の目が、獲物を品

定めするように俺を見下ろしていた。

「っ……」

作務衣を肩まで剥がされた。上半身が露わになる。鎖骨に唇が落ちた。舌が胸の中央を辿り、乳首に吸い付く。

「ひ……うっ♡♡ あ、吸うな……っ♡♡」

舌先で乳首をちろちろと転がされ、歯で軽く挟まれた瞬間、腰が浮いた。もう片方の乳首を指で摘まれ、左右から違う刺激を叩き込まれる。

男の舌が胸から腹へ下りていく。臍をちろりと舐められ、下腹部のうぶ毛に唇が這った。パンツを足首まで下ろされ、勃起したペニスが薄暗い空間に晒される。

「……綺麗な形してる」

「見るな……っ」

「見る。全部見る」

声が低い。逆らう気力を根こそぎ奪う響き。

男がペニスを口に含んだ。根元まで一息で呑み込まれ――

「――ッ!!♡♡」

視界が白く弾けた。声が出そうになった口を、男の空いた手が塞ぐ。大きな掌で顔の下半分を覆われ、押し殺した喘ぎが指の隙間からひゅ、ひゅ、と漏れた。

(すご……何これ……っ♡♡ 奥まで入って……喉で、しめつけ…
…っ♡♡♡)

舌が亀頭を包む。裏筋を舐め上げ、頬の内側で吸い上げる。ずる、と音を立てて根元まで呑み直すたび、喉奥のぬめった熱が先端を絞った。

「んゝ ――っ♡♡ んんゝ ……っ♡♡♡」

太腿が震える。爪先が丸まる。口を塞ぐ男の指を、無意識に舌で舐めている自分に気づいて――恥ずかしさで目の奥が熱くなった。

（最悪……何してんだ俺……っ♡ 知らない男の指、舐めて……っ♡♡）

男がペニスから口を離した。舌先で尿道口をちゅ、と突いた。ひっ、と腰が跳ねたところに、また根元まで呑み込まれる。その緩急に思考が千切れた。

「ん――っ♡♡ んゝ ……っ♡♡ も、出……っ♡♡」

口を塞がれたままだから、声が籠って余計に卑猥に響く。男が一度口を離し、涎の糸を引きながら見上げてきた。

「出していいよ。――俺の口の中に」

再び深く咥えられた。喉が収縮するように締め、その圧力に――

「っ――んゝ んゝ んゝ ッ♡♡♡♡」

果てた。

くぐもった嬌声がカプセルの中に響いた。男が全て飲み下す。最後の一滴まで舌で絞り出すように舐め取られ、過敏になったペニスがびくびくと痙攣した。

呼吸を整える間もなく、男が顔を上げた。精液の味が残る唇で、俺の口を塞ぐ。

深いキス。舌を差し込まれ、自分の味を口移しされた。苦くて塩辛い液体が舌の上に広がる。

「ん……ッ♡ やだ……自分の、味……っ♡♡」

「全部飲めよ」

逆らえなかった。舌で押し返そうとしたら、逆に絡め取られた。男の唾液と精液が混ざって喉を滑り落ちていく。

「1回目」

額にかかった前髪を指で払われた。ぞっとするほど柔い仕草。

「——まだ寝かさないけど」

＊

男がスラックスのポケットからコンドームとミニパウチのローションを取り出した。

「……持ち歩いてるの」

「備えあれば。——脚、開いて」

「待って、俺そっちは——」

「経験ないの？」

「……1回だけ。でもあんまり……」

「気持ちよくなかったんだ。——じゃあ俺が上書きしてやる」

膝を押し上げられた。カプセルの幅が足りない。片方の脚は壁に、もう片方は男の肩に乗せられる。逃げ場がどこにもない体勢。

ローションをたっぷり指に塗った手が、肛門の皺をゆっくりなぞった。冷たい液体が熱い皮膚に触れ、びくりと震える。

「力抜いて、息吐いて」

囁きに従って息を吐いた。その瞬間、指先が一関節だけ押し込まれた。

「っ……あ……♡」

きつい。入り口が指一本を締め上げる。男は急がない。浅い位置で指をゆっくり回し、内壁をほぐしていく。
第二関節まで入ったところで、指の腹が前壁を探るように押した。

「ひっ——!?♡♡」

腰が跳ね上がった。萎えかけていたペニスが、一瞬で硬くなる。

「……ここか」

見つけた、という声。
その一点を集中的に押し、擦り、圧する。指が中でくるりと回るたび、膝の力が抜けていく。

「あ……あ、あ……♡ なにそれ……なんで、こんな……っ♡♡」

（前立腺——ここか……こんなの知らない……っ♡♡ こんなに気持ちいい場所が中にあったなんて……っ♡♡♡）

「気持ちいいだろ？ もう一本入れるよ」

二本目が押し込まれた。ぬるりとローションが内壁を濡らし、二本の指がゆっくり開く。鋏のように広げられ、ぐにぐにと内側の肉を解す音が耳に届いた。

「ひっ……う……っ♡♡ 広げ、ないで……っ♡♡」

「中、もうとろとろだ。吸い付いてくる」

「言うな……っ♡ そういうの……っ♡♡」

「自分で聞こえるだろ、この音」

ぐちゅ、ぐちゅ、と指が出入りする水音。消灯後のカプセルホテルに、その卑猥な音だけが響いた。
隣のカプセルで誰かが寝返りを打つ音がして——凍りついた。

「やだ、聞こえ——」

「じゃあ静かにしないとな。——これ入れたまま声出すなよ？」

三本目。

肛門がぱくぱくと指を咥え込み、内壁がうねるように締まった。前立腺を三本の指で押し潰されながら、自分の手で口を塞ぎ、涙目で男を睨んだ。

（おかしい……男なのに……こんな場所で、こんなに……っ♡♡♡
指三本も飲み込んで、痛くないどころか気持ちいいとか……身体
どうなってんだよ……っ♡♡）

でもその目は——もうとろけ始めていた。

＊

男がベルトを外し、ジッパーを下ろした。取り出されたペニスが目に入って——息が止まった。

指三本よりも明らかに太い。暗がりでもわかる凶悪なサイズ。血管がうっすらと浮き、先端がてらりと光っている。

「……無理、それ入らない」

「入るよ。お前の中、もう準備できてる」

コンドームが装着される。ローションを追加で塗りたい音。脚を抱え上げられ、先端が入り口に押し当てられた。

「息吐いて。——入れるぞ」

ずぶ、と亀頭が呑み込まれた。

「あ——ぐ、っ♡♡ おっきい……っ♡♡」

少しずつ、少しずつ押し進められる。内壁がペニスの形に広げられていく。指とは全然違う。太くて硬くて、中を完全に支配するよう

に奥へ侵入してくる。

根元に近づくにつれ、ぱんぱんに張り詰めた圧迫感が増した。

——根元まで入りきった瞬間。腹の奥で何かに当たった。

「ひあ——っ!?!♡♡♡」

背中が弓なりに反った。男の手が口を塞ぎ、押し殺された悲鳴がくぐもる。

「奥まで入った」

額の汗を舌で舐め取られた。首筋に吐息がかかる。

「——すげえ締まってる」

(腹の奥……何かに当たってる……っ♡♡ 中が、こいつの形に変えられていく……っ♡♡♡)

動き始めた。最初はゆっくり。引いて、押して。カプセルの狭さのせいで大きなストロークは取れない。その代わり、奥を抉るような小刻みな突き上げ。

ずちゅ、ずちゅ、と湿った音が鳴る。

内壁がペニスを絞り上げ、引き抜くたびにローションと腸液の混じった粘液が泡立った。

「んゝ……っ♡♡ んゝ んゝ……っ♡♡ あゝ……っ♡♡♡」

口を塞がれているせいで、喘ぎが全部鼻に抜ける。籠った嬌声がかえって淫靡に響いた。

角度が変わった。

前立腺を擦り上げる軌道になった瞬間——全身が痙攣した。

「ここだろ。——ここ突かれると、おかしくなるんだろ？」

わかっていてそこを狙い打ちにしてくる。一突きごとにペニスから先走りが溢れ、腹に水溜まりを作った。

目から涙が零れた。口を塞ぐ男の指の隙間から涎が垂れ、顎を伝い、首筋を濡らす。

「泣いてる顔、最高にエロい」

その言葉に、肛門がきゅっと締まった。

（なんで……褒められて、締めてんだよ……っ♡♡ おかしい……俺おかしくなってる……っ♡♡♡）

テンポが上がる。カプセルのフレームがかすかに軋んだ。肩が隣のカプセルとの壁に当たり、こつこつと音が鳴る。

気づかれているかもしれない。聞こえているかもしれない。

その恐怖が——快楽を増幅させた。

「も、無理……っ♡♡ 中、おかしく……なって……っ♡♡♡」

口を塞がれたまま叫びかけた唇を、今度は唇で塞がれた。

キスしながら突き上げるリズムが加速する。舌と舌が絡み合い、唾液が混ざり合い、唇の端から零れる。

男の背中の中のシャツを掴んだ。爪を立てた。痛みなんてもうどこにもない。快楽だけが下腹部を支配していた。

「中を出すぞ」

「っ……♡ コンドーム……してるから……っ♡♡」

「ああ。——でもお前、ゴムの上からでも中に出されたような顔してる」

「して、ない……っ♡♡♡」

最奥を突き上げられた。腰を押し付けたまま、男が低く唸って射精する。ゴム越しでも、中で熱いものが膨らむ感覚がわかった。

「あゝ——っ♡♡♡♡」

ほぼ同時に、触れられてもいないペニスから射精した。白い液が腹と胸に飛び散り、二人の間をべたべたに汚す。
男が引き抜くと、肛門がひくひくと閉じきれずに痙攣した。

「……3分だけ休憩な」

「……え？」

＊

3分。

たった3分で、男の手が使用済みのコンドームを外していた。

「なあ。生でしたい」

「……は？ やだ、それは……」

「さっき中イッた時、お前の中がぎゅって締まったの、ゴム越しでも分かった。——直接感じたい」

「知らない……そんなの……」

「嫌なら断れよ。——断れるなら」

まだ閉じきれていない肛門に指が触れた。ぷくりと柔らかくなった入り口が、指先をすぐに飲み込む。さっきの情事で解されきった中は、ローションと腸液でぬるぬるに濡れていた。

「あ……っ♡♡ もう……敏感……っ♡♡」

「ここがこんなに柔らかくなってるのに、断れんの？」

二本の指が入る。ゆっくりかき混ぜられる。じゅぶ、じゅぶ、と水気を含んだ音。

腰が勝手に揺れ始めた。身体がもう快楽を覚えてしまっている。

(断れない……もう、この身体が……こいつの指を求めている……っ♡♡ 男なのに……犯されて、自分から欲しがるとか……っ♡♡♡)

「……もう、いい。好きにして」

＊

壁に背を預けて座った男の上に、座らされた。
背面座位。背中が男の胸板に密着する。天井に頭がつきそうな体勢。
自分で腰を下ろす。生のペニスが入り口を押し広げ――

「あゝ ……っ♡♡♡ なに、全然ちが……ゴムと、全然……っ♡♡♡」

ゴムなしの熱と硬さが直接内壁に伝わった。
血管の凹凸が内壁を擦る感触。コンドーム越しでは感じなかった生々しい脈動。ペニスがどくどくと脈打つのが、中でわかる。

「きつつ……お前の中、最高だ」

男の手が腰骨を掴み、上下に動かし始めた。自分の体重で深く突き上げられる形になり、前立腺を毎回正確に抉られる。

ぬちゃ、ぬちゃ、ずぶずぶ――生の結合部から溢れる水音。もうローションだけじゃない。身体が勝手に分泌した粘液が混ざっている。

「ひう……っ♡♡ あ、あ♡♡ あゝ あゝ ……っ♡♡♡ だめ、声……声出ちゃ……っ♡♡♡」

もう声を殺しきれなかった。押し殺した喘ぎがカプセルの外に漏れ始める。
どこかのカプセルでごそりと物音がした。

聞こえている。

確実に——聞こえている。

「聞こえてるぞ。——でも止まらないだろ？」

「やだ、止めて……いや止めないで……っ♡♡♡ わかんない……
っ♡♡♡」

（何言ってんだ俺……止めてって言いながら止めないでって……狂
ってる……完全に狂ってる……っ♡♡♡）

「どっちだよ。——じゃあ聞いてやる。俺のが欲しい？」

「……ほし、い……っ♡♡」

「何が？ ちゃんと言って」

男の手が腰の動きを止めた。奥まで入ったまま動かない。前立腺の
すぐ横をペニスの先端が圧迫していて、そこから一ミリも動いてく
れない。

焦らされている。言わせるために。

「……おちんぼ……もっと奥まで……っ♡♡♡」

言ってしまった。

言った瞬間、男が腰を跳ね上げた。ずぶんッ、と一番奥まで突き上
げられ、声が裏返った。

「あゝ あゝ ッ♡♡♡♡ そ、こ——っ♡♡♡♡」

男の手がペニスを握り、突き上げのリズムに合わせて扱き始めた。
前立腺への圧迫と外からの刺激の挟撃。頭の中が白く蕩けていく。

「中で出す。——全部お前の中に」

「出して♡♡ 中に出して♡♡♡ もう、いい……全部……っ♡♡
♡♡」

男が腰を跳ね上げ、最奥で射精した。

コンドームなしの——生の精液が腸内に注ぎ込まれる。

「あゝ あゝ ッ♡♡♡♡♡」

熱い。ゴムの時と全然違う。直接粘膜に当たる熱量が脳を灼いて、ペニスから白濁が飛んだ。作務衣の裾と男のシャツを汚す。射精が終わっても、男は抜かなかった。中に入れたまま、耳朶を舐める。

「出したの、まだ全部中にあるよ」

「……わかる……あつい……♡♡」

「抜いたら零れるから。もう少しこのまま」

肛門が精液を含んだまま、ひくひくとペニスを締め付けている。

（男の精液……中に入ってる……♡♡ 全部、感じる……どくどく脈打ってるのも、精液があつくてどろどろしてるのも……♡♡♡）

怖いくらい、気持ちよかった。

＊

数分後。男が引き抜くと、とろりと精液が流れ出した。肛門はもう自力では閉じられない。ぱくぱくと小さく開閉を繰り返す隙間から、白濁が零れて太腿を伝い、シーツに染みを広げていく。

「……もう1回、いける？」

「……」

自分から、男のシャツの裾を引っ張っていた。

「……して。もっと」

「何を？」

「……もう、わかってるくせに」

声が震えた。恥ずかしい。でも止められなかった。

「入れて。中にいっぱい出して。……もう全部、あんたので汚して……♡♡♡」

男の目の色が変わった。

＊

うつ伏せにされた。

腰だけを持ち上げられ、顔と胸はシーツに押し付けられる。尻だけが突き出された格好。カプセルの狭さが、逆にこの体勢にちょうどいい。

男が背後から覗き込む気配がした。さっき中に出された精液でてらてら光る肛門を——見られている。

「すごいな……俺の精液、こんなに出てきてる」

「見ないで……っ♡♡ 恥ずか……っ♡♡♡」

「見るよ。——ここに、また注いでやるから」

一気に入れられた。

ずぶずぶと、精液の残る中に生のペニスが沈んでいく。さっきの精液がローション代わりになって、ぐじゅ、と淫らな水音が鳴った。

「あゝ あゝ あゝ ……っ♡♡♡♡ おくっ、おく当たって……っ♡♡♡」

うつ伏せの角度が奥を直撃する。前立腺より更に深い場所を突かれ、全身がびくびくと跳ねた。シーツを握る手が白くなる。噛み締めた唇の端から涎が垂れた。

「んゝ お……っ♡♡ なに、これ……さっきより、奥……っ♡♡♡♡」

男が髪を掴んだ。顔をシートから引き剥がされる。

「声、殺すな。もう聞かれてるんだから。——好きなだけ鳴けよ」

（聞かれてる……カプセル中の人に……俺が男に犯されて鳴いてるの、全部聞かれて……っ♡♡♡）

その背徳感が快楽の導火線に火を点けた。

「やだ……っ♡♡ でも、止まんない……あ♡♡ あ♡♡ あゝ あゝ ……っ♡♡♡♡ ナカ、ぐちゃぐちゃにされて……っ♡♡♡♡♡」

もう何を口走っているのか自分でもわからない。快楽で壊れた頭から、卑猥な言葉が零れて止まらない。

男のピストンがテンポを上げた。ぱん、ぱん、と腰が尻に打ち付けられる音。ずぷずぷ、ぐちゅぐちゅ、と精液混じりの中を掻き回す音。カプセルのフレームが明確に軋み始めた。

「中、さっき出した精液でぐちゃぐちゃだ……最高にえろい音させてる」

「もう無理♡♡ 無理♡♡♡ イく、またイっちゃ——あゝ あゝ あゝ ……っ♡♡♡♡♡」

シートにペニスを擦り付けながら、ドライオーガズムに達した。触れられてもいないのに、内壁がペニスを万力のように締め上げ、痙攣が止まらない。

男もその締め付けに耐えきれなかった。腰を最奥まで叩き込んで射精する。

今日4回目の精液が腸の奥に注がれ、腹がわずかに膨らむ感覚。

「あっ♡♡♡♡ あつい……あつい……♡♡♡ なかに、いっぱい

……♡♡♡♡♡」

射精が続く間、男は腰を小刻みに揺らし続けた。精液が結合部から溢れ、睾丸を伝い、シーツにぼたぼたと滴る。

二人とも動けなくなった。男が覆いかぶさったまま、汗だくの背中に額を押し付ける。

背中に伝わる男の心臓の音。速くて、荒くて。

「……名前」

「……え？」

「名前、教えて。——もう名前も知らないまま帰れないだろ」

(4回も中出しされて……名前も知らないって……何なんだよこの状況……♡♡)

「……柏木、遥」

「桐生怜司。——遥」

名前を呼ばれた瞬間、肛門がきゅっと締まった。男が——怜司が、低く笑う。

「反応した。——朝までまだ3時間あるけど」

「……もう無理……」

「無理って言いながら、ここは離してくれないんだな」

中に入ったまま、怜司が耳に唇を寄せた。

「朝になったら——連絡先、交換しような」

小さく頷いた。カプセルの外で、誰かがトイレに起きる足音が通り過ぎていく。

＊

夜明け前。

二人はカプセルの中で絡み合ったまま微睡んでいた。怜司がまだ半勃ちのまま中に入っている。身じろぎすると、中のペニスが動いて、溜まった精液がぐちゅりと音を立てた。

「ん……っ♡♡」

「……また反応してる」

寝ぼけた声。掠れていて、さっきよりもっと甘い。

「あんたのが……まだ中にあるから……♡♡」

「抜かないでいい？」

「……いい」

怜司の手が腹を撫で、そのまま下へ降りていく。

「……また、するの？」

「チェックアウトまであと2時間あるだろ」

「……ばか」

でも身体は拒んでいない。むしろ怜司のペニスを中に咥え込むように、きゅっと力を入れていた。

「——ほら、自分からしてるじゃん」

怜司が緩やかに腰を動かし始めた。

ぬちゅ、と精液が泡立つ音がした。

中に溜まった4回分の精液が、ゆっくりした抽送でかき混ぜられて、とろとろのぬかるみになっている。

「ん……あ……っ♡♡ 動かないで……動いたら、また……っ♡♡♡」

「また——何？」

「……イっちゃう……っ♡♡♡」

「イケよ。何回でも」

遅い。さっきまでの激しさが嘘みたいに、ゆっくりと奥を擦る動き。前立腺の横を滑るように撫でて、引いて、また押す。焦らされている。気が狂いそうな速度。

「はぁ……っ♡♡ もっと……もっと、奥……っ♡♡♡」

「自分で動けよ」

「っ……♡♡♡」

腰を揺らした。自分から。

精液まみれの中で、怜司のペニスに自ら腰を押し付ける。ぐちゅ、ずちゅ、と溢れた精液がシーツに零れて、もうどこもかしこもべたべただった。

「あ♡♡ あ♡♡ あゝ ……っ♡♡♡ れいじ……っ♡♡♡」

初めて名前で呼んだ。

呼んだ瞬間、怜司の腕に力が入った。背中から抱きすくめられ、耳元で低く唸られる。

「——もう一回呼べ」

「れいじ……っ♡♡♡ れいじ、れいじ……っ♡♡♡♡」

「離さない」

たった三文字が、鼓膜の奥に焼き付いた。

怜司の腰が深く沈んだ。最奥を貫かれ、背中が弓なりに反る。朝焼けの気配なんて微塵もない暗がりの中で、5回目の射精が腸の奥に注がれた。

「あゝ ッ♡♡♡♡♡♡」

名前を呼びながら果てた。

ぐったりと怜司の腕の中に沈む。まだ中にペニスが埋まっている。
精液が溢れて太腿を伝い落ちる音が、静まり返ったカプセルの中に
ぼた、ぼた、と響いた。

怜司の指が、汗で張り付いた前髪を梳いた。
さっきまで身体を壊す勢いで貫いてきた手と同じ手。

「チェックアウトまであと1時間半」

耳元で囁かれた。

「シャワー浴びて——飯食って——連絡先交換して——」

指が顎を掴み、振り向かされた。暗がりの中で、切れ長の目が至近
距離で笑っている。

「——それからもう一発」

「……ほか」

頬が勝手に緩むのを、止められなかった。
怜司の精液がまだ中でどくどくと脈打っている。身体が芯から蕩け
ていて、もう元に戻れない気がした。

壊された。

たった一晩で——声だけで堕ちた男に、棺桶みたいなカプセルの中
で、朝まで壊された。

怜司の腕がまた腰に回る。まだ硬いままのペニスが中で存在を主張
している。

「……ほんとにまだするの？」

「遥が離してくれないんだろ」

「……っ♡♡♡」

反論できなかった。

自分の肛門が、怜司のペニスをきゅう、と締め上げている自覚があったから。

怜司が、ゆっくり腰を動かし始める。

朝焼けが差し込む前の、最後の暗がりの中で。

最終運行の寝台特急で同室に
なった元バーテンダーに
一杯付き合えよと誘われ朝まで
5回中出しされた話

身体が揺れた。ベッドの硬いスプリングが背中を押し返して、また揺れる。

消灯後の車内は闇に沈み、カーテンの隙間から非常灯の薄明かりだけがかすかに差していた。

「っ……、ん……♡」

うなじに、吐息がかかった。

男の——ウイスキーの匂いが染みた、低い体温の呼吸。

「っ、やめてくださ……っ♡」

「眠れないんだろ。もう三十分、ずっと寝返り打ってた」

桐生、と名乗った男の声が、すぐ耳の後ろで響く。

二段ベッドの上段から降りてきたのはほんの十五分前だ。眠れないなら一杯付き合えよ、と。フラスクのウイスキーを紙コップに注いで差し出されて——二杯飲んだだけで頭がぐらぐらする。

酔いのせいだ。そうに決まっている。この男と肩が触れ合うだけで、耳の先が熱いのは。

「いい匂いするな、お前」

首筋にかかる声と同時に、指先がうなじの産毛をなぞった。

背骨を電気が駆け抜ける。

「っ——！♡」

（なに、なんで——こんなの……っ♡）

身を引こうとしたけれど、下段ベッドは壁だった。背中が冷たい金属パネルに当たって、それ以上逃げられない。横幅七十センチの寝台。大人ひとりで寝るのがやっとの狭さに、大人がふたり。

「動くなよ。他の客に聞こえるぞ」

カーテン一枚向こうには通路があって、その先には他の乗客がいる。

桐生の大きな手が腰に回った。Tシャツの裾から入り込んだ指が素肌を滑り、腹を這って、下へ。

ズボンのゴムの縁を、長い指がなぞった。

バーテンダーの手。シェイカーを振っていた手。関節が太くて、指が長くて――。

「あ、ちょっと……手、手を……っ♡♡」

声が震えている。自分の声じゃないみたいだ。

桐生の掌がズボンの上から僕の股間を覆った。

そして――止まった。

「……………」

「……………っ♡♡」

沈黙が、列車の振動だけを残して落ちた。

男のモノがあるべき場所に、ない。代わりに掌が捉えたのは、やわらかい割れ目の輪郭。

「お前――カントか」

声に、驚きはなかった。確認するような、低い声。

「違っ……ちが、触らないでください……っ♡♡」

両手で桐生の腕を押し返そうとする。だめだった。片腕の力がまるで違う。

暗闇の中で初めて知った、この男の身体の大きさ。肩幅。前腕の硬さ。押し返せない。

「もう二度と会わない相手だろ。力抜けよ」

ボタンが外された。

ジッパーが——下がる。

パンツの縁に指が差し込まれて、膝まで一気に引き下ろされた。

「やだっ……やめ……っ♡♡」

夜気が股の間に触れる。

暗がりの中、桐生の指先だけが、割れ目の形を確かめるようにゆっくりと滑った。

「っ……♡♡」

(触られてる……僕の——見られたくない場所を……っ♡♡)

カントボーイ。

男の身体なのに、股の間だけが女と同じ形をしている。生まれつきの——僕の、コンプレックスの核。

誰にも触らせたことがない。自分でだって、ろくに触ったことがない。

「へえ……」

桐生が、低く息を漏らした。指の腹がクリトリスの包皮に触れて、ゆっくりと上にずらす。

「ンッ……♡♡」

声が、出た。

薄い皮がめくれて、小さな突起が露出する。親指の腹が、そこを——円を描くように擦った。

「っ、あ……っ♡♡ やめ、そこ……っ♡♡」

「声出さないように頑張ってるの、健気だな」

乾いた肌に指が擦れる、かすかな摩擦。ほんの数秒のはずなのに、身体の奥から——じわり、と。

自分の意思とは無関係に、割れ目がうっすらと湿り始めた。

(嘘……なんで……触られただけで……っ♡♡)

認めたくなかった。男なのに、こんな場所が反応するなんて。こんな場所が、あるだけでも――。

「……濡れてきてる」

「違っ……ちが……っ♡♡」

「何が違うんだよ。ほら」

くちゅ、と。

指の腹がクリトリスを押し込んだ瞬間、下から滲んだ液が音を立てた。

「ッ♡♡♡」

唇を噛み殺す。カーテン一枚の向こうに、人がいる。声を出したら――。

「――でもここは？」

爪の先が、露出したクリトリスの先端をカリッ♡と引っ掻いた。

「ひゅっ――♡♡♡」

腰がベッドから浮いた。自分の身体が、勝手に。

「いい反応。ここ、触ったことないだろ」

「な……っ♡♡ ないですっ……触ったこと、なんか……っ♡♡」

「だろうな。こんなに敏感なのに誰にも開発されてないまんこ、初めて見た」

(まんこ、って――僕の……僕のこと……っ♡♡)

その言葉が、胸の奥を抉った。

男なのに。男として生きてきたのに。まんこ、と——この男は、何の躊躇いもなく言った。

桐生の中指が、割れ目を下に辿った。入り口に——指先の、丸い圧。

「っ……待っ……そこは……っ♡♡」

「中也確かめていい？」

「だめ……っだめですっ……入れないで……っ♡♡♡」

返事を待たなかった。

ずぶ、と。中指が第一関節まで、沈んだ。

「ひゝっ——♡♡♡」

処女膜の膈壁が、異物を押し返そうと締まる。痛いわけじゃない——でも、初めて何かが中に入ってくる圧迫感に、全身が硬直した。

「力抜け。締めすぎると俺の指が折れる」

「む、無理……無理ですっ……抜いて……っ♡♡」

「無理じゃないだろ。ほら——ここ、もうこんなに」

ぐちゅ、と。指が少し動いただけで、奥から愛液がじわりと染み出して指を濡らした。

「っ……♡♡」

（嘘……奥から……出てる……っ♡♡ やだ……こんなの……身体が、勝手に……っ♡♡♡）

認めたくないのに、身体は正直だった。

桐生の指が膈壁を擦るたびに、粘膜が絡みついて離さない。中が、自分の意思を無視して——指を飲み込もうとしている。

「嫌だ嫌だって言ってるのに、中はこんなにぐちょぐちょだぞ」

くちゅ、くちゅ、と狭い個室に水音が響いた。

列車の走行音すら、この音を掻き消してくれない。枕元の壁から伝わるレールのジョイント音だけが、規則正しく刻んでいる。

「お前のまんこ、口より正直だな」

「そ、そんな言い方……っ♡♡ やだ……っ♡♡」

指が二本になった。

中指と薬指——バーテンダーの長い指が、膣壁を内側から押し広げながら、奥を探る。

「——ここか」

指の腹が、ざらついた粘膜の一点を捉えた。

「ひいゝっ♡♡♡♡」

身体が跳ねた。枕に顔を埋めて、悲鳴を殺す。

「見つけた。Gスポット、ここだろ」

コリ、コリ♡と。指の腹がその一点を、正確に、執拗に擦り上げた。

列車がカーブに差しかかる。車体が傾いて——その振動が桐生の手に伝わり、指が意図しない深さまで押し込まれた。

「っ……ひゝう……♡♡♡ そ、そこ……奥、だめ……っ♡♡♡」

「カーブのたびに俺の指が奥まで入るな。この列車、お前を犯すために揺れてるみたいだ」

「やだ、そんなこと……っ♡♡ 言わないで……っ♡♡♡」

（だめ……頭がおかしくなる……♡♡ 男なのに……こんな場所で

……こんなに……♡♡♡)

桐生の身体が、下へ滑った。

暗がりの中、僕の太腿の間に——顔が、近づいてくる。

「ま、待って……何して……っ♡♡」

「拭ってやる」

「嘘……っ♡♡ そんなの嘘……っ♡♡♡」

熱い吐息が、割れ目にかかった。

——ちゅるっ♡♡

舌が。下から上へ。割れ目を、一直線に舐め上げた。

「んあゝ あゝ あゝ っ♡♡♡♡」

声が出た。抑えられなかった。

枕に顔を押しつけて、両手で口を塞いだけれど——ぜんぜん足りない。

「んぐ……っ♡♡ んんゝ っ♡♡ やだ、やだ……舐めないで……っ♡♡♡」

桐生は答えない。狭いベッドで、僕の太腿が桐生の耳を挟んでいる。逃げ場がない——狭すぎて、脚を閉じれば桐生の頭を締めつけるだけ。

ぬちゅ、ぬちゅ、と舌が割れ目の奥に潜り込んだ。肉襞を、舌先が丁寧な舐め分けていく。

「ひゝ ……っ♡♡ あ……あゝ ……っ♡♡ やだ……中まで……舌、入って……っ♡♡♡」

溜まった愛液を舌で掬い取り、そのまま上へ——クリトリスを唇

で含んで、吸い上げた。ぢゅる♡と音を立てて。舌先がフリッ♡フリッ♡と弾くように、小さな突起を翻弄する。

「んひゝ いいい……っ♡♡♡♡ だめ♡♡ そこ吸わないで♡♡♡
吸わないでえ……っ♡♡♡♡」

(壊れる……♡♡ 頭の中が……白くなって……♡♡♡ 男なのに……おまんこ舐められて……声が……止まらない……♡♡♡♡)

指三本が膣内に入っていた。いつの間に増えたのかもわからない。

三本の指でGスポットをコリコリ♡♡と擦り上げながら、同時にクリトリスを舌で吸う。上と中と——二箇所同時に、容赦なく。

「ひゝ うゝ っ♡♡♡ やだ……声、出ちゃ……んんゝ っ♡♡♡ カーテンの向こうに……人が……っ♡♡♡♡」

「じゃあ枕でも噛んでろ」

噛んだ。枕の端を歯で噛みしめて——でも。

「んぐうゝ っ♡♡♡♡」

全身が痙攣した。

下腹の奥から、波が——せり上がってきて——止まらない。

「っっっ♡♡♡♡♡」

——ふしゅっ♡♡♡

嘔いた。

桐生の顔に、手に。シーツに。びしゃびしゃと。

「あ……あゝ ……♡♡♡ な、なにこれ……っ♡♡ 出て……止まらな……っ♡♡♡♡」

「潮吹きだろ。処女のくせにすぎえ量だな」

人生で初めてのアクメだった。

身体が自分のものじゃないみたいに震えて、止まらない。脚がガクガク痙攣して、腰が浮いて、また液体が溢れる。

「やめ……もう……敏感すぎて……っ♡♡」

桐生は指を抜かなかった。

痙攣するカントの中で、余韻に浸る粘膜を——ゆるく、コリ♡コリ♡と擦り続ける。

「すげえ量だな。シートびしょびしょ。列車降りるとき車掌に見られたらどうする？」

「やだ……それ言わないで……っ♡♡♡ やめてください……もう……っ♡♡♡」

(いやだ……♡♡ おまんこが……指に吸いついてる……♡♡ やだ……離したくないって……身体が……っ♡♡♡)

桐生がゆっくりと身体を起こした。指が抜ける。ぬるり、と。抜けた瞬間にカントがひくひくと収縮して——その音が、自分の耳に届いた。

ベルトの金具が鳴った。ジッパーが下がる音。

暗がりの中、非常灯のわずかな光に——浮かぶ。

太く、長く、反り返った輪郭。カリが張り出していて、先端がてらてらと濡れている。

「……………っ♡♡♡」

目が、そこに釘付けになった。

恐怖と——それだけじゃない何かが、下腹の奥でうずいた。

「怖い？」

「……こ、こわ……い……です……♡♡」

「怖くても入るよ。お前のまんこ、もうこんなにトロトロに準備できてるし」

太腿の内側を伝い落ちる愛液の感触が、その言葉を裏づけていた。反論できない。

「入れるぞ」

「っ……待って……まだ心の準備が……♡♡♡」

「準備なんかいない。お前のまんこはもう出来てる。足りないのは頭の言い訳だけだろ」

亀頭が、入り口に触れた。

ぬるり——と。愛液と潮でぐしょぐしょになった入り口に、硬い先端が押し当てられる。

「……っ♡♡♡♡」

(入ってくる……♡♡ おちんぼが……僕のおまんこに……っ♡♡♡)

ずぶ……ずぶぶ……♡♡

処女の膣壁が抵抗する。でも、潤滑が十分すぎた。指三本で広げられて、潮まで吹いて——もう、押し返す力が残っていない。

不可逆的に、沈んでいく。内臓が押し上げられる感覚。下腹の奥を、硬くて熱い異物がゆっくりと——侵していく。

「あゝ……あゝ あゝ……♡♡♡ おなか……っ♡♡ おなかの中に……来てる……っ♡♡♡」

——コツン。

子宮口に、カリ首が当たった。

「ッひゝ あゝ あゝ あゝ っ♡♡♡♡♡」

背中が弓なりに反った。暗闘の中、自分の身体が勝手に形を変える。

「っ……おなか……おなかに、当たって……♡♡♡」

「子宮口だな。ちょうどいい——全部入った」

根元まで。桐生の恥骨と僕の恥丘が、密着していた。

カントが限界まで押し広げられて——内壁が、ちんぽの形にぴったり張りついている。

「お前の処女まんこ、俺のちんぽで一杯だな」

「っ……♡♡♡ そんな……一杯って……っ♡♡♡♡♡」

(本当に……入ってる……♡♡ 僕の中に……この人のおちんぽが……♡♡ 全部……♡♡♡)

男としてのプライドなんて、もう。この瞬間に——。

「動くぞ」

桐生が僕の身体を横向きに抱えた。背後から——スプーンのように密着する。狭い下段ベッドでは、これが唯一の体位だった。

桐生の胸板が背中に貼りつく。腕が僕の腹を抱え込む。

ガタン、ゴトン。

列車のジョイント音に合わせるように——腰が、動いた。

ぬぷ……ぬぷ……ぬぷ……♡♡

「ひっ♡ んっ♡ あっ♡♡ ……揺れるたびに……奥に……♡♡♡」

「列車のリズムでやるの、悪くないだろ。寝台特急ならではだ」

精密なストローク。バーテンダーの手がカクテルを注ぐように――繊細な力加減で、膣壁の内側を擦り上げる。亀頭がGスポットを掠めるたび、全身にスパークが走った。

「ひ`んっ♡♡ ひ`んっ♡♡ あ`……だめ……揺れるたびに……奥……♡♡♡」

「ガタンゴトンのたびに俺のちんぽが子宮口ノックしてるだろ。この列車、お前のまんこ犯すために走ってるみたいだな」

(やだ……♡♡ 本当に……列車が揺れるたびに……おちんぽが奥まで……♡♡♡ 気持ちいい……気持ちいいって……認めたくないのに……♡♡♡♡)

列車がトンネルに入った。

轟音が車体を包む。窓が震えて、壁が震えて――その音に紛れて。

「あ` あ`っ♡♡ あ` あ` あ`っ♡♡♡ もっと……奥、もっと……っ♡♡♡♡」

自分の口から出た言葉に、僕自身が凍りついた。

「……今、もっとって言ったな」

「ちが……違います……っ♡♡ 今のは……トンネルの音で……♡♡♡」

「嘘つけ。まんこが俺のちんぽ締めつけてきてる。正直なのはいつもこっちだ」

桐生が体勢を変えた。

僕を抱き上げて、自分の膝の上に乗せる。対面座位。ベッドの天井が低くて、頭を下げないと当たる。閉塞感。桐生の顔が近い。吐息がかかる――ウイスキーの残り香。

「っ……♡♡♡」

自重で、ちんぽが最奥まで達した。
ずちゅん♡♡——子宮口にカリ首がハマる。

「あゝ ひゝ いゝ っ♡♡♡♡♡」
「いい声。もっと出せ、トンネルの中だ。誰にも聞こえない」

桐生の両手が僕の腰骨を鷲掴みにして、上下に揺さぶり始めた。
操られるまま、腰が上がって——落ちる。落ちるたびに、子宮が突き上げられる。

「やだ……壊れる……壊れちゃう……♡♡♡♡」
「壊れない。まんこはもっと開く」

子宮口をカリ首でグリグリ♡グリグリ♡と挟む。内側からノックするように——突き上げる。

「ああゝ っ♡♡ ああゝ っ♡♡ ああゝ っ♡♡♡ 子宮っ♡♡ 子宮う♡♡♡ ノックしないで……っ♡♡♡♡」

桐生の肩にしがみついた。涙が出ていた。いつから泣いていたのかわからない。

「お前の子宮、俺のちんぽの先にくっついてきてるぞ。抜くたびに子宮が追いかけてくる」
「嘘……っ♡♡」
「嘘じゃない。そんなにちんぽが好きか？」
「す、好きじゃ……好きなんかじゃ……っ♡♡♡♡」

(嘘だ……♡♡ 好きじゃないのに……おまんこが……離したくないって……♡♡ 男なのに……ちんぽで子宮突かれて泣いてるなんて……♡♡♡)

——無意識に、腰が動いていた。
自分から。桐生の上で。

「あ……っ♡♡」

「自分で腰振ってるの気づいてる？」

桐生の声が、耳元で。

「さっきまで嫌がってたのに。もうまんこが勝手にちんぽ欲しがってるじゃん」

「ちが……っ♡♡ 違う、これは……列車が揺れて……っ♡♡♡」

「列車のせいにするなよ。お前が自分の腰で俺のちんぽに子宮押しつけてるんだぞ」

ぐちょ、ぐちょ、と。愛液と先走りが混ざった水音が響く。

列車がトンネルを抜けた。

一瞬の静寂。水音だけが——残酷なほど鮮明に、狭い個室に響き渡った。

「……♡♡♡♡」

「出すぞ。お前の子宮に直接種付けしてやる」

「やだっ……中はだめ……っ♡♡♡ 妊娠……っ♡♡♡♡」

「カントボーイだろ？ 孕むかもな」

甘い声だった。残酷な台詞を、蕩けるような低音で。

「孕んだらどうする？ まあ、もう二度と会わないから関係ないか」

「そんな……っ♡♡♡ ひどい……っ♡♡♡♡」

子宮口にカリ首をハメ込んだまま——。

どぶ、どぶ、どぶ♡♡♡

「あゝ あゝ あゝ あゝ っ♡♡♡♡♡ なか……熱い……っ♡♡♡ 精子……いっぱい……子宮に……っ♡♡♡♡♡」

精液が子宮内壁を叩く脈動を、全部感じた。

ドクン、ドクン、と桐生のちんぽが膣内で脈打つたびに、白い液体が注がれていく。

僕も——イった。

声にならない声で、全身を痙攣させて。

抜かれた瞬間、カントからどろりと白濁液が溢れ出した。精液と愛液が混ざり合って、太腿を伝い——シーツに落ちる。

カントがひくひくと痙攣して、精液を押し出しながらも、名残惜しそうに収縮を繰り返していた。

「はあ……はあ……♡♡♡ ……もう……終わり……ですよね……♡♡♡」

「何言ってるんだ。まだ夜は長いぞ」

桐生がフラスクを取った。ウイスキーを口に含んで——そのまま僕の唇に押し当てる。

舌が入ってきた。アルコールの灼熱と、桐生の唾液が流し込まれる。

「んぐっ……んっ♡♡ んんゝっ♡♡♡」

むせた。喉が焼ける。でも——桐生の舌が僕の口の中を蹂躪するのを、振り払えなかった。

「もう一回いけるだろ」

「む、無理です……♡♡ もう、おまんこ……ひりひりして……♡♡♡」

「じゃあ、こっちは？」

桐生の指が、尻の谷間を辿った。

カントから溢れた精液と愛液を掬い取って——肛門の周囲に、ゆっくりと塗り込む。

「っ——！♡♡♡ そっちは違……っ♡♡♡ そこはおまんこじゃないです……やめてください……♡♡♡♡」

「知ってるよ。だから試すんだ」

精液まみれの指が、肛門にずるりと入った。するり——潤滑が十分だった。

「ひぁっ♡♡♡♡」

カントとは違う感触。もっと硬くて、もっと窮屈で——異物感が鋭い。

「ここは処女ってレベルじゃないな。キッツキツだ」

「当たり前です……っ♡♡ そんなところ……使ったことない……っ♡♡♡♡」

指が二本に増えた。ゆっくりと広げていく。同時にもう片方の手がカントに伸びて——指三本が、膣内に差し込まれた。

上と下。両方の穴を、同時に指で犯される。

「ひゝ いゝっ♡♡♡♡♡ ふたつ……同時に……だめ……っ♡♡♡♡♡」

じゅぶ、じゅぶ、と二つの穴から同時に水音が響く。カントからは愛液と精液の混合物が。肛門からは精液を潤滑にした粘液音が。

「上のまんこも下の穴も、両方俺ので塞いでやる。どっちの穴が気持ちいい？ 正直に言え」

「わかんない……♡♡♡ 両方……両方だめ……♡♡♡♡」

(頭がおかしくなる……♡♡ 二つの穴から同時に……快感が……混ざって……♡♡ どっちがどっちか……もう……♡♡♡♡)

「そうか。じゃあ両方使ってやるよ」

肛門にちんぽが押し込まれた。

カントには指三本を突っ込んだまま。二穴同時。

「あゝ ひゝ いゝっ♡♡♡♡♡ ふたつ、いっぺんに……あたま……
おかしくなる……♡♡♡♡♡」

列車がまたトンネルに入った。轟音。窓も壁も震える。

その音に紛れて——僕は声を解放した。もうカーテンの向こうを
気にする余裕が、消えていた。

「あゝ あゝ あゝっ♡♡♡ おひゝ いゝっ♡♡♡♡ だめだめだめ♡
♡♡ 二つの穴いっぺんに犯されるの♡♡♡ むり♡♡♡♡♡」

桐生が尻をピストンしながら、カントに挿した指で子宮口をコン
コン♡コンコン♡と叩く。二つの穴から同時に押し寄せる快感の波
に——理性の残骸が砕けた。

「ぷしゅ♡ ぷしゅ♡♡」

カントから潮が漏れた。指の隙間を縫って、精液混じりの液体が
噴き出す。

ぬちゃ、めちゅ、と二穴から同時に卑猥な音——。

桐生が肛門からちんぽを抜いた。

「……っ♡♡♡ ……あ……♡♡」

——空白。二つの穴が同時に空になった、一瞬の虚脱。

「ちんぽ欲しいなら自分で言え。どっちの穴に欲しい？ 選べ」

「……………っ♡♡♡♡」

沈黙。列車のジョイント音だけが響く。ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。

「……♡♡♡♡♡」

(選ぶの……♡♡ 自分で……言うの……♡♡♡ 男なのに……おちんぽください、って……♡♡♡♡)

涙が頬を伝った。

プライドと快樂の間で引き裂かれて——でも、身体の奥がうずいて、空っぽの穴がひくひく♡♡と物欲しそうに収縮して、もう——。

「おまんこ……♡♡♡」

壊れた声だった。

「おまんこにおちんぽ入れてください……♡♡♡♡ 中に……中に出して……お願いします……♡♡♡♡♡」

自分から求めた。

その事実に、また涙が溢れた。

「……いい子だ」

桐生が尻から抜いて、カントに再挿入した。正常位で覆いかぶさる。狭いベッドで全身が密着する。汗と体液で肌がぬるぬる滑って、列車の揺れで身体が擦れ合う。

「ひ`んっ♡♡ あ`んっ♡♡ おちんぽ……おちんぽおまんこに入ってる♡♡♡ うれしい♡♡♡♡」

(何を言って……♡♡ 僕は何を……♡♡ でも止まらない……♡♡♡ おちんぽがうれしいって……おまんこが……♡♡♡♡)

激しいピストン。ベッドのスプリングがギシギシ軋む。列車の揺れと腰の動きが共鳴して、カントの最奥を抉るように突き上げる。

ぶちゅ、ぶちゅ♡♡——一度目の精液がまだカントに残っている中にちんぽがピストンする。精液が泡立ち、ぐちゅぐちゅと掻き回される。

「あゝ あゝ っ♡♡ おなかの中♡♡ ぐちゅぐちゅ♡♡♡ 精子かき混ぜないで♡♡♡♡」

「かき混ぜてんのはお前のまんこだろ。俺のちんぽ絞り上げてきてるのそっちだぞ」

二度目の射精。

出しながらピストンを止めない。精液がカントの縁から溢れて、桐生の肉棒を伝い——結合部から泡状になって押し出される。

「おゝっ♡♡ おゝっ♡♡ おゝっ♡♡♡♡」

白目を剥いた。口が開いたまま閉じない。涎が顎を伝って、シーツに落ちる。

もう言葉にならない。声にもならない。ただ全身が痙攣して——意識が、白く、飛んだ。

◇

ガタン、ゴトン。

午前三時。列車は東北の闇を走っている。窓の外は漆黒で、車内は完全に静まりかえっていた。

意識が戻ったとき、最初に感じたのはカントのうずきだった。

ひりひりして、熱くて——でもそれだけじゃない。空っぽになった穴が、物欲しそうに脈打っている。

「……起きたか」

桐生がベッドに横たわっていた。仰向けで、片腕を頭の下に敷いて。

その股間に——まだ硬い、ちんぽが。

「…………♡♡♡」

(まだ……勃ってる……♡♡ あんなに出したのに……♡♡♡)

自分でも信じられないことを、僕はした。

桐生の腰に、跨った。

「ほう」

驚きとも感心ともつかない声を、桐生が漏らした。

「すごいな。自分から跨がって腰振るの、もう完全にメスの顔だぞ」

「だって……♡♡♡ おちんぽ、入ってないと……おまんこが寂しくて……♡♡♡♡ ずっと中にいて……♡♡♡♡♡」

(何を言ってるの、僕は……♡♡ こんな……こんなの僕じゃない……♡♡ でも止まらない……♡♡ おちんぽが欲しい……おまんこにおちんぽがないと……♡♡♡♡♡)

自分の重さで、ちんぽに腰を落とす。

ぱちゅん♡♡♡

「あゝ ひゝ いゝ ♡♡♡♡♡ おちんぽ♡♡ 奥まで♡♡♡ 子宮にっ♡♡♡♡」

ぱちゅ、ぱちゅ、ぱちゅ♡♡——自分で腰を打ちつける。桐生が下から突き上げ、僕が上から落とす。ベッドのスプリングが悲鳴を上げる。

カントから一度目と二度目の精液がどろどろと溢れて、桐生の腹を汚していく。その上にさらに愛液と潮が加わって——二人の下半身は体液まみれだった。

「ぐぷ♡♡　ずぷずぷ♡♡♡　おちんぼ子宮に当たるぅ♡♡♡♡♡
気持ちいい♡♡♡♡♡」
「腰の振り方覚えるの早いな。まんこの才能あるよ、お前」
「才能って……♡♡　そんな才能いない……♡♡♡♡♡　でも…
…止まらないっ♡♡♡♡♡」

もう抵抗も羞恥もなかった。壊れた目で——自分の快樂だけを、貪っている。

「出すぞ」
「出して♡♡♡　子宮に♡♡♡♡　いっぱい♡♡♡♡♡」

三度目の射精。子宮が精液で満杯で、注ぎ込むたびにカントの縁から精液が逆流して押し出される。ぬちゅん♡♡と溢れ、太腿を、シーツを、どろどろに汚していく。

◇

窓の外が、うっすらと白み始めていた。
最後のトンネルを抜けた向こうに——夜明けの光。

「……………♡♡♡」

僕は四つん這いになっていた。
自分の手で——カントを、左右に開いて見せている。

精液がどろりと垂れた。ひくひくと収縮を繰り返すカントの奥か